

# 20世紀初頭における国民意識形成とナショナリズムに関する一考察

——『子ども向け日曜新聞』(*Il Giornalino della Domenica*)と少年向け書籍にみる日本とイタリアの比較

上野隆生 UENO Takao

—はじめに

1 — 20世紀初頭の日本とイタリアの政治状況

2 — ヴァンバ (Vamba) と『子ども向け日曜新聞』 (*Il Giornalino della Domenica*) にみる国民意識とナショナリズム

3 — 『少年世界』と少年向け書籍にみる国民意識とナショナリズム

—おわりに

**[Abstract]** Among the ex-Axis powers, Germany is often referred to in comparative studies over fascism and nationalism in Japan. But such comparative studies of Japan and Italy has been less explored than expected. For the purpose of filling this lacuna, this paper deals with the nationalism and national consciousness in Japan and Italy at the beginning of 20th century, focusing on *Il giornalino della domenica* in Italy and *Shonen Sekai* (and other books for children) in Japan, both of which targeted for the children as readers.

State and nationalism, or national consciousness have much to do with the formation of fascism. Therefore, what kind of national consciousness they had specifically assimilated during their childhood would be crucial in considering the mental ground for young people to stand for and to take part in the fascist movement in the near future.

In Italy, the homeland of fascism, Corradini's and Associazione Nazionale Italiana (Italian Nationalist Association)'s nationalism deserved the mainstream of nationalism which would flow into fascism. But Luigi Bertelli (Vamba) and *Il giornalino della domenica* proposed another type of nationalism and national consciousness, seeking independence without colonialism and emphasizing goodwill as human being. They treated children not as inferior but as equal, which was well epitomized in the Confederazione Giornalinesca (Confederation of Subscribers to *Il giornalino della domenica*). But such kind of nationalism would scarcely receive public attention and faded away before the WWI began.

In Japan, the Meiji government sought centralization and successfully accomplished it. With assistance of careerism and indoctrination centered on emperor and state, *Shonen Sekai* and other books for children did didactically support such kind of centralization "from above," which helped to induce militarism as well as aggressive nationalism in children. In that sense, a kind of single track was laid from nationalism to militaristic fascism in Japan.

In general, both Japanese and Italian nationalism has an inclination to colonialism and aggressive attitudes. But *Il giornalino della domenica* exemplified another possibility of nationalism which would not turn into fascism. In Japan, on the contrary, *Shonen Sekai*

was quite instrumental in proposing aggressive nationalism and colonialism, which would lead to militaristic fascism in the end. *Il giornalino della domenica* and *Shonen Sekai*, both of which aimed to educate children, showed good contrasting and paradoxical examples of nationalism in the beginning of 20th century.

## —はじめに

1920年代後半から1930年代前半にかけて、イタリアでは国家の優越原則を制度化することでムッソリーニ独裁体制は確立した<sup>1)</sup>。ファシズムの哲学者といわれ、ファシスト政権で教育相も務めたジョヴァンニ・ジェンティーレ (Giovanni Gentile, 1875–1944年) は<sup>2)</sup>、「ファシスト的個人とは国家そのもの」であり<sup>3)</sup>、「ファシストの観念は国家の重要性を強調する」と強調した<sup>4)</sup>。ムッソリーニ (Benito Mussolini, 1883–1945年) も、「ファシズムの原理の要点は、国家の観念であり、……ファシストは国家を主張する」と主張した<sup>5)</sup>。こうして、ファシズムという新たな政治的造語を生み出したイタリアでは<sup>6)</sup>、「国家こそがすべてであり、国家以外には何物もなく、国家に反するものがあってはならない」がスローガンとなった<sup>7)</sup>。このような情勢に呼応するかのようになり、1930年代になると日本でも「ファシズム」は一世を風靡した<sup>8)</sup>。しかし「ファシズム」の内容については必ずしも明確でないまま、人口に膾炙した嫌いがあった<sup>9)</sup>。確かにファシズムは「多様な政治・哲学思想のコラージュ」で「矛盾の集合体」であり<sup>10)</sup>、決して独自の哲学体系を持つことはなく<sup>11)</sup>、ある種の混合主義 (syncretism)<sup>12)</sup> を有していた。だが国家が前面に出て全てに優越する点は、如何に「ファジー」であっても<sup>13)</sup> ファシズムが全体主義である以上<sup>14)</sup>、ファシズムの重要な特徴といえよう。特に1930年代以降の日本・ドイツ・イタリアでは、国家が個人を圧倒する体制にあり、その点でこれら三国が共通していることは否定できない。

ファシズムはナショナリズムに「プラス」した現象との指摘もあるように<sup>15)</sup>、国家と国民意識の形成、そしてナショナリズムは、ファシズムに密接に関連している。事実イタリアでは、1910年に設立されたイタリアナショナリスト協会 (Associazione Nazionale Italiana, 以下 ANI と略記する) に象徴されるナショナリズムがファシズムの下地を形成した<sup>16)</sup>。ANI を設立したコッラディーニ (Enrico Corradini, 1865–1931年) は、「ファシズムはナショナリズムである。より正確には、ファシズムはナショナリズムの偉大な実現である」と述べて憚らなかつた<sup>17)</sup>。そしてジェンティーレは、ファシズムの起源は第一次世界大戦に先立つ15年間の反実証主義的な知識人の風潮にあると論じている<sup>18)</sup>。ジェンティーレが指摘した第一次世界大戦に先立つ15年間という20世紀初頭の時期は、さまざまな意味でナショナリズムが強まった時期であった。

ファシズムを検討するにはナショナリズムの検討が不可欠であるとともに、いかなる性質を持つナショナリズムがファシズムの下地を形成したのかを把握することは重要である。その際に、国民 (nation) 意識の形成、パトリオティズムとナショナリズムの関係ない

し差異などにも目配りが必要となる。

本稿は、ファシズム及びナショナリズム自体を分析することが主眼ではなく、ジェンティーレが指摘した第一次世界大戦に先立つ15年間、とりわけ日露戦争後から1910年代初頭の時期について、日本とイタリアにおける国民意識の形成とナショナリズムの特質について検討しようとするものである。本稿で具体的に分析対象として取り上げるのは、イタリアの『子ども向け日曜新聞』(*Il Giornalino della Domenica*)と日本の『少年世界』および少年向けの書物である。なぜ1920年代以降ファシズムが広がりを見せたのかを考える際に、世代的な要素も無視できない<sup>19)</sup>。1920年代以降に成人を迎える世代の者たちには、反ファシズム運動に携わった人々はいたものの、大方はファシズムを受け入れ、支持した。この世代の者たちにとっては、ファシズムは日常の存在であったといえよう。それでは、この世代の人々には、幼少期にどのような国民意識が形成され、どのようなナショナリズムが醸成されたのだろうか。前述のコッラディーニの指摘などを踏まえれば、ファシズムとの連関を見る上でこれらの点は閑却できないところであろう。そのため、具体的に幼少年期の若者を対象とした新聞・雑誌を検討する意味は、少なからぬものがあるといつてよい。

また、『子ども向け日曜新聞』については、日本ではほとんど取り上げられないことがない<sup>20)</sup>。一方、『少年世界』については、教育学・日本文学などの分野で研究の蓄積はあるものの、同誌掲載作品の類型化や掲載作品・記事の記述紹介に力点を置いたものが多く<sup>21)</sup>、本稿の視点とはかなり異なるといつてよい。また、ナショナリズムやファシズムに関する比較研究という点では、日本においては日本とドイツに、英米においてはドイツとイタリアに、それぞれ重点が置かれてきた傾向が否めない<sup>22)</sup>。したがって、日本とイタリアとを如上の観点で比較することそれ自体で意味があるといえよう。

以下、20世紀初頭の日本とイタリアの政治状況を概観した上で、両国における子ども向け雑誌に関する検討を進めていくこととする。

## 1 ―― 20世紀初頭の日本とイタリアの政治状況

1871年から1873年にかけて欧米を巡歴した岩倉使節団は、1873年5月9日アルプス山脈を越えてイタリアに入った。その後同年6月2日にヴェネツィアを發つまでの約一か月間イタリア各地を回った。イタリアについては、それまでのヨーロッパ諸国とは「頓ニ面目ヲカユルヲ覺」え、市内の「塵芥」、飲酒飲食、「其生業ニ於ル、通シテ勉勵ノ氣象ニ乏シク、北方諸国トハ、頓ニ異俗ヲ覺ユルナリ」と断じている<sup>23)</sup>。そして、ローマ、ナポリ、ヴェニス、パレルモ、などの人口10万人以上の大都市について、各都市の商店は「ミナ人ヲ待ツニ伶俐ニシテ、交際掬スヘシ、物価ヲ幻耀スル甚シク、折シテ半額、或ハ三分ノ一ニ及フコトアリ、是マタ沃土懶惰ノ習ヒニ生スルコトナルカ」と同じく報告書の中で指摘している<sup>24)</sup>。

一方、後に政治家となるイタリアの青年ジョヴァンニ・デ・リセイス (Giovanni De Riseis、

1872—1950年)は、日清戦争直前に日本を訪れた。デ・リセイスは、清潔さ、単一性、排外主義的傾向、「繊細な嗜好」、その陽気さと生活様式において、日本人はラテン民族の性格と類似する点を多く持っている指摘している<sup>25)</sup>。さらに、前述のコッラディーニは、僅少な資源、人口の多さなどの点で日本はイタリアと最もよく似た国家であるとしつつ、日本の戦争に勝利しようとの意思はイタリアが欠いているものであると指摘している<sup>26)</sup>。

これらの事例を見る限り、イタリアの日本イメージと日本のイタリアイメージとの差異は明らかである。このような差異が生じた背景の一つに、いわゆる「上からの革命」の強さとそれに伴う準拠国の選択が考えられるのではないだろうか。バリトン・ムーアによれば、日本・ドイツ・イタリアはいずれも「上からの革命による近代化」を遂行したが、ドイツが最も進んだ一方で、日本はその程度が少なく、イタリアはさらに少なかった<sup>27)</sup>。この指摘を踏まえるなら、模範・準拠すべき対象としてドイツを捉えていた日本のイタリアに対する評価・イメージは決して高いものにはならないだろう。逆にイタリアから見た場合、とりわけコッラディーニのようなナショナリストの目には、日本との類似性は直近の改革方向として具体的に映った可能性が否定できない。

次に世紀転換期から第一次世界大戦前までの時期について、両国の政治状況を概観しておこう。

統一後も、イタリアでは地域主義 (campanilismo) が依然として色濃く残り、南北の格差を始めとする経済構造の跛行性を背景に、国民の創出あるいは「イタリア人をつくる」<sup>28)</sup>ことはなかなか実現できなかつた<sup>29)</sup>。1900年代に入り、ジョリッティ (Giovanni Giolitti, 1841—1928年) が断続的に組閣し、「ジョリッティ時代」を迎えた<sup>30)</sup>。ジョリッティは「自由主義と民主主義のための戦い」を標榜する一方で、トラスフォルミズモによる無節操ともいえる議会内多数派形成により持続的に政権を維持した。このようなジョリッティズモへの批判は左右両翼から展開されることになる。1903年の『レオナルド』(Leonard) 創刊を皮切りに、『イル・レーニョ』(Il Regno, 1903年創刊)、『ラ・ヴォーチェ』(La Voce, 1908年創刊)などの雑誌がフィレンツェを中心に相次いで刊行された<sup>31)</sup>。

ジョリッティ時代には、自由主義を掲げる政府の下で国民所得の増加、初等教育の普及などが見られた<sup>32)</sup>。その一方、ある種の閉塞感が増幅し、ジョリッティ体制への批判が強まった時期でもあった。労働運動や社会主義運動とともに、ナショナリズム運動も強まった。それを象徴するのが、1910年にコッラディーニが設立した ANI である。ここに、対外侵略を求める急進的ナショナリズム団体が具体的に登場した<sup>33)</sup>。

翻って、日清戦争後の日本では、藩閥政府と政党との離合集散、それによる新党結成や党名変更などの目まぐるしい情勢が展開した。そして1900年に、伊藤博文と自由党の系譜を引く憲政党との提携が成立し、立憲政友会が設立された。総裁はまもなく西園寺公望に代わり、1901年の第一次桂太郎内閣成立後は、藩閥勢力を代表する桂と政党勢力を代表する格好の西園寺とが交互に政権を担う桂园時代を迎えた。「情意投合」・「協同一致」を謳いながら<sup>34)</sup>、議会における多数政党と官僚藩閥勢力との提携妥協により、議会は平穏で政

友会代議士にも利するところがあった<sup>35)</sup>。かかる状況は、「桂内閣が倒れたるも、代りて興れる西園寺内閣は、前内閣の政策を継承するに定まり、官僚内閣か、政党内閣か不明ならず<sup>36)</sup>、「西園寺内閣は政党内閣の名ありて、其の実なく<sup>37)</sup>と批判された。

第一次西園寺公望内閣に代わった第二次桂太郎内閣は「緊縮」を強調し、1908年に戊申詔書を発したが、「桂首相は投機を疑われたる者、其人が投機を戒むるは聊か奇異に感ぜらる」という有様であった<sup>38)</sup>。日露戦後になると、労働者階級の動向、社会主義思想・運動への警戒心などから、「世上の風潮」に対する支配層の不安、憂慮が広がった。それは人心の「偷安」の風が広く蔓延し、さまざまなレベルで「個」の解放が要求されるに至ったからであった。具体的には、享楽への欲求の増大、「立身出世」への焦燥、「成功」の礼讃、滔々たる「拝金の風潮」として現れ、特に青年層にかかる傾向が顕著であると支配層には映った<sup>39)</sup>。新聞紙上にも「煩悶」関連記事が多くみられるようになった<sup>40)</sup>。それに対して、「煩悶」は「科学主義の熱中」に対して「明治道徳」の衰退によるものであるとして、かかる「明治の文明」の「欠点」、すなわち「彼の文明の皮相に心酔して、昏昏たる者を覚醒し、青年者の煩悶を除き、社会の悪潮を翻へし、国民の覚悟を定むる」のは今である、との指摘も見られた<sup>41)</sup>。

また日本は日清戦争で台湾を領有し、日露戦争後には朝鮮の保護国化を進め、最終的には植民地とした。その過程で、植民地主義とナショナリズムは一体化した。この間に「一等国」意識の肥大化が雁行したことにもそれは現れている。日清戦争を契機に中国・朝鮮への侮蔑感は増大し、欧米各国と肩を並べる「一等国」となったとの意識が蔓延した。日露戦後になるとこの傾向はさらに激しくなった。「夜郎自大」と批判する指摘もあったが、大勢は「一等国」意識に捉われ、ナショナリズムが一層強化された<sup>42)</sup>。このような日本の状況は、イタリアのコッラディーニらのナショナリストからみれば羨むべき状況であった。なぜならば、1896年のアドゥワでの敗北に象徴されるように、東アフリカへの植民地拡大というイタリアの企図は奏功しなかったからである。イタリアがトリポリタニア・キレナイカを領有するのは、1911年の統一50周年記念祭で改めて君主の神格化を強調し<sup>43)</sup>、同年の伊土戦争を経た後であった。

1900年代の日本・イタリアともに、一応の安定とともにある種閉塞した両義的な状況が続いていた。同時に、日本においては「一等国」意識の肥大化と植民地主義的ナショナリズムの高揚が、イタリアにおいては侵略主義的ナショナリズム構築の積極的な動きが、それぞれ見られたのである。

## 2 — ヴァンバ(Vamba)と『子ども向け日曜新聞』(Il Giornalino della Domenica) にみる国民意識とナショナリズム

『子ども向け日曜新聞』(Il Giornalino della Domenica、以下GDDと略記する)は、1906年6月24日に創刊された。編集者は、ヴァンバ(Vamba)という筆名の方が有名なルイーゼ・ベル

テッリ (Luigi Bertelli, 1858—1920年) である (以下本稿ではヴァンバで表記する)。ヴァンバはフィレンツェに生まれ、ローマでジャーナリストとして活動した後、フィレンツェに戻った。そして満を持してGDDを創刊した。GDDは計4期に分けることができるが、本稿では1906年から1911年7月までの第一期を扱うこととする<sup>44)</sup>。

創刊号に掲載された「企画書」(Il Programma) にヴァンバの決意と意気込みが示されている<sup>45)</sup>。そこでヴァンバは、子どもたちの教育ということを強く意識しながらも、「7歳から15歳」の読者層すべてを満足させ、決して退屈させずに興味関心を育てていこうとするGDDの基本的方向性を述べている。寓話から科学的記事までの広範なジャンルを盛り込み、読者の興味を惹くとともに、読者「全員がすべてを読んでほしい」と読者に要望もしている。読者から日々の生活や休暇での様子を活写する写真を広く求めて潤沢に掲載し、表紙を始めとした図版・挿画も意欲的に掲載した。特に、創刊二年目の夏休み前、「子どもたちは安堵のため息をつく。試験が終わって、学校は終わりだ！」との書き出しで、大量の写真とともに各地の子どもたちの様子を伝えた<sup>46)</sup>。以後、読者からの投稿写真も含めて、休暇中の子どもたちの様子や日々の情景を伝える記事や通信がしばしば登場する<sup>47)</sup>。その結果経費がかさむ事態となり、遂に1911年に休刊をやむなくさせる事態につながった。だが、最後の「いとまごい」においても、ヴァンバはそのようなGDDの企図と編集方針について、「何よりも私は君たちに誠実さを示してきた」との自負を披歴し、その誠実さは「君たち明日の人間が我々の生きている社会よりもよりよい社会をしっかりと築き上げることのできる唯一の誠実さ」であると述べている。そして、「空虚な修辞ではなく、心底誠実な情感を伝える者を強調する誠実さで、いつもその読者に祖国を人間性への永遠の理念の炎を燃やし続けた」と強調した。換言すれば、ヴァンバにとってGDDの労苦の代償は「若者に美を愛で善を愛することを教えること」に他ならず、「小さな読者が善良で勇敢なイタリア市民に成長するように」GDDでさまざまな努力をしてきたのである<sup>48)</sup>。

ヴァンバは「大人たちは……最早取り返しがつかないほど壊れている。彼らとは最早何もできない。……子どもたちとであればそうではない。子どもたちは、純粋な心を持ち、高潔無私で寛容なあらゆる行動をすぐにもとろうという精神を有している。子どもたちによって、望むものを得ることができるのである」と述べ、子どもたちへの期待を明言していた<sup>49)</sup>。そのような期待は、当時の大人たちならびにジョリッティ体制への批判を込めて子どもたちの生き活きとした実相を活写した『ジャン・ブラスカの日記』を見ても看取することができる<sup>50)</sup>。『ジャン・ブラスカの日記』は、1907年2月17日<sup>51)</sup>から1908年5月17日<sup>52)</sup>にかけてGDDに連載され、その後単行本化されて今日まで版を重ねている<sup>53)</sup>。この他、ヴァンバはGDDに多くの記事や論考を掲載した。具体的な歴史的出来事や無名の市民を含めた実在の人物や著名な人物などを紹介しながら、「企画書」と「いとまごい」で記したことをヴァンバは子どもたちに伝えようとした。

GDDの記事や論考から、以下のようにヴァンバならびにGDDの特性を窺い知ることができる。

まず、イタリア国民としての意識形成と統一イタリアの重視、国民的リソルジメントの強調があげられる<sup>54)</sup>。その際、よく引かれるのは、ガリバルディ、マッツィーニ、カルドゥッチ、コッローディ、デ・アミーチスらの具体的人物とその逸話である<sup>55)</sup>。とりわけガリバルディへの傾倒には顕著なものがある<sup>56)</sup>。

ヴァンバ自身がリソルジメントの系譜を引くことから、トリエステ、イストリア、ゴリツィア、ダルマチア、トレントなどの「回収されざるイタリア」を回復すべきであるとのイッレデンティズモ (irredentismo) ならびにそれと密接に結びついている反オーストリア感情にも相当に強いものがあったといえる。バリッラへの評価もその表れである。バリッラ (Balilla) は 1746 年のオーストリアに対する抵抗運動で、最初に投石したとされる少年の綽名である。バリッラはイタリアの反オーストリア感情・運動の象徴となった。ヴァンバも国民的リソルジメントの象徴として、イタリア性 (Italianità) を実現し、イタリアの自由と独立を具現する存在としてバリッラを評価している<sup>57)</sup>。同時に見逃してはならないのが、善良さ、正直さ、誠実さ、温厚さ、などの人間性ならびに平和と自由などの諸価値の強調である<sup>58)</sup>。「企画書」と「いとまごい」でヴァンバが述べた通りであった。

ヴァンバは、当時の議会や政府について「愛国主義的レトリックで夢中になって泥酔状態にいる」とし、さまざまな階級の要求に対してより重要な議論をなすべきなのにそれを忘却していると批判する<sup>59)</sup>。だがヴァンバは、トリポリタニア領有や植民地主義には反対していた<sup>60)</sup>。ヴァンバが強調するのは「市民教育」であり、GDD が「政治の領域に子どもたちを呼び込んだ」最初であり、「市民教育」は GDD によって提示されるとしている<sup>61)</sup>。

このような認識を具体化するものとして 1908 年 6 月、ヴァンバは GDD 購読者同盟 (Confederazione Giornalinesca、以下「同盟」と略記する) を結成した<sup>62)</sup>。ヴァンバ自身が会長に就任した「同盟」は、イタリア全国さらには他地域の購読者を網羅する組織となり、選挙で代議員や閣僚、地方首長を選出した。さらに「食いしん坊同盟」の動向や、「食いしん坊は悪徳か否か」という議論が議会では交わされるなど、子どもたちにとっては切実で興味を惹く議題があげられた。重要なのは、限りなく現実の組織に近い模擬政府・模擬議会が設定された点にある。そして会長のヴァンバは、「同盟」では「両性の権利は平等に認められている」として、「同盟」の政府は「男の子たちとお嬢さんたちとによって代表されなければならない」と強調した。さらに、ヴァンバは「同盟」設立大会で「6 か月から 60 歳までの男女の小僧っこたち！」と呼びかけた<sup>63)</sup>。男女両性に呼びかけている点もさることながら、「小僧っこ」性の強調にも注目してよいだろう。自由と平等を重視し、共産主義に共鳴しつつ後にソ連の体制を批判するフランスのジッドの「若者は未来の可能性に満ちているものである」との言にも通ずるものがある<sup>64)</sup>。

ヴァンバは、国民的リソルジメントの系譜を引き、イッレデンティストでもあった。その意味で、イタリアの国民意識を形成しようと努め、ナショナリズムの醸成に力を尽くしたといえよう。だが、そのナショナリズムは、植民地主義や対外的侵略に向かうコッラディーニや ANI のナショナリズムとは一線を画するものであった<sup>65)</sup>。

### 3 — 『少年世界』と少年向け書籍にみる国民意識とナショナリズム

日清戦争開戦後の1895年1月1日、博文館は「明治お伽噺の巨人」<sup>66</sup> 巖谷小波(1870—1933年)を主筆として<sup>67</sup>、それまで同社が発行していた類似の雑誌を統合する形で『少年世界』を創刊した<sup>68</sup>。博文館は、同じく1895年1月1日に総合雑誌『太陽』も創刊している<sup>69</sup>。

創刊号冒頭には皇太子(のちの大正天皇)の写真を掲げ、次に天皇・皇族・陸海軍に対する「万歳」と佐々木信綱による祝歌を掲載した。『少年世界』の姿勢と方向性を如実に示しているといえよう。創刊直前に出された『少年世界』の新聞広告では、少年を「大帝国第二国民」、「第二維新の先頭者たらんとする」者としている<sup>70</sup>。創刊号でも「名誉ある新強国の少国民」と称揚しつつ、「我帝国の光栄を発揚」するよう慫慂している<sup>71</sup>。その後も『少年世界』は、日清戦争は「第二の維新」であり、その結果日本は「世界の第一等国となり」、オーストリア、イタリア、オランダ、スペインなどよりも上位を占めるに至ったと強調した<sup>72</sup>。そして、これからは英米独仏露と競争していくことになるが、それは「少年諸君」の責任であるとともに「功名立身の機」であり<sup>73</sup>、その際に必要なのは「尚武の気風」であると煽動めいた主張を展開している<sup>74</sup>。日本が「第一等国」となり、「東洋の一大強国」<sup>75</sup>となったなどの認識は繰り返し強調されている。「少年」は、「名誉ある新強国の少国民」であり<sup>76</sup>、「第二の国民」と位置づけられた<sup>77</sup>。日清戦争後に植民地として領有した台湾においても『少年世界』は部数を伸ばした<sup>78</sup>。

当時の日本においては異例ではないが、「少年」には女子は含まれていない。『少年世界』に遅れて『少女世界』(1906年9月～1931年10月)などの少女向け雑誌が登場する<sup>79</sup>。このように男女が別の購読者対象として扱われていた点は、GDDとは大きく異なる。またGDDは、前述の通り早くから読者の日常生活などの投稿写真を多数掲載していた。『少年世界』も1911年以降「読者通信」欄に読者から募集、投稿された写真を掲載するようになったが、その多くは正面に正対するもので身分証明書用と見まがうものばかりである。

創刊当初、「論説」・「小説」・「史伝」・「科学」・「遊戯」・「文学」・「雑録」・「時事」などの項目が設定され、それぞれに該当記事が掲載された。この項目区分はかなり可変的で、「軍事」や「お伽噺」が加わるとともに、「少年新聞」や読者間の「懇談会」も登場する<sup>80</sup>。「学校案内」の欄もあるが、創刊号に掲載されたのは「陸軍士官学校案内」であった。そして、「軍事」関連の記事が少なからず掲載され、「小説」・「歴史」などの項目でも、戦史を扱った記事が目立つ。従来の研究では「小説」や「お伽噺」に目が向きがちのようであるが、「軍事」・「英雄」・「立身出世」という項目に『少年世界』の特色があるのではないだろうか。特に「軍事」関連では、兵隊の生活・武器・戦史・戦記物など広範囲にわたり、具体的に紹介している点が注目される。

そのような傾向と「軍事」関連記事は日露戦争に際してさらに増加し、『少年世界』は日清戦争時以上に「戦記」を不断に掲載した。また、日露戦争前から「第一等国」意識は増幅



されていたが<sup>81)</sup>、日露戦後になると、日本国内全体でさらに「一等国」意識が高まった。これに対して「夜郎自大」との自戒も一部では存在したが、大方はますます植民地主義や国家を前面に出す傾向が強まったといえよう<sup>82)</sup>。『少年世界』も「日本は小さくても強い」<sup>83)</sup>、「少年諸君」は「第二の国民」、「新帝国の未来」を担い、「世界の日本の少年」である<sup>84)</sup>、などの論調を増幅させていった。その一方で、「懇談会」などの項目については文芸雑誌の色彩が濃厚となり<sup>85)</sup>、誌面中の「少年新聞」社説は「娯楽機関」化を自認していた<sup>86)</sup>。

そのような状況で、国家も個人もヒエラルヒー的序列の中で位置づけようとする傾向がさらに強まった<sup>87)</sup>。国家の「一等国」意識と個人の「立身出世」とが、密接に絡み合うようになったのである。典型的な例が、『少年世界』の「立身案内」特集の臨時増刊号である<sup>88)</sup>。どのようにすれば「立身出世」できるかといったハウツー物の記事や、各種学校案内などを載せている。このような即物的世俗的傾向は、軍事や兵士に関する具体的な記事がほぼ毎号掲載されている点にも通じている。「立身出世」に関しては、「名士の少年時代」<sup>89)</sup>などで各分野の著名人の立志伝を紹介したり、「日本英傑伝」<sup>90)</sup>や「十五英雄鑑」<sup>91)</sup>など「英雄特集」ともいえるほど人物伝を列挙する記事などがあり、英雄崇拜と立身出世とを絡めて読者に意識付けしようとしていることが窺われる。

『少年世界』のみならず、当時の少年向け書籍でも、「武勇を尚ぶは、日本国民の気風なると共に、また日本少年の特質」であり<sup>92)</sup>、「今や生存競争の世の中で」「勇者の世界」であるなどの主張が展開された<sup>93)</sup>。そこでは「戦争」は不可欠のもので、「人類の歴史」は「戦争の歴史」であるとするなど<sup>94)</sup>、現実の状況を「戦争」と短絡的類比的に結び付け、少年に「世界的勇者」となることを望むような論調も少なくない。辛亥革命に際して、『少年世界』は掲載した記事の末尾に「支那は今戦争で大騒ぎだ！」と、恰もこの機会に乗じるのを推奨するような文言を掲載している<sup>95)</sup>。

植民地主義は自明のこととして唱えられるとともに、そのための軍備拡張も同様に当然のこととされた<sup>96)</sup>。朝鮮の植民地化に際して『少年世界』は、「大陸国の仲間入り」をしたと諸手をあげて歓迎している<sup>97)</sup>。また同じ時期に、『少年世界』は「国民教育の補助機関たるべき大任を帯びて」いると自称している<sup>98)</sup>。1908年の戊申詔書発出に際して間を置くことなく解説特集を編んだ『少年世界』が<sup>99)</sup>、創刊以来の上意下達に資する方向性を明確にするのは当然であった。主筆の巖谷は、日露戦後の「学生の墮落問題」や「煩悶問題」に対して、「学生の分を忘れた話」と切り捨て、「子供は子供らしくして居れば」よく、「強いて大人ぶらうとする」のが「抑も間違の初まり」であり、「子供には子供の文学、即ちお伽噺を勧め度い」としている<sup>100)</sup>。このような巖谷の姿勢は、GDDを主宰したヴァンバのそれとは大きく異なっていた。

そして、如上の巖谷や『少年世界』及び少年向け書籍は、この時期の子どもたちに植え付けようとしていた国民意識とナショナリズムの特性を示しているといえよう。換言すれば、教育勅語から戊申詔書へとつながる中央集権的な国家主義の流れの文脈で、『少年世界』は、単線的に植民地主義と侵略的ナショナリズムへとつながる下地を子どもたちに形成す

ることに寄与したのである。

### —— おわりに

ナショナリズムが心情 (state of mind) あるいは意識の活動 (act of consciousness) である以上<sup>101)</sup>、想像の産物もといえる「国民を創る」必要性は大きい<sup>102)</sup>。そのためには、国民意識を涵養しなければならない。

イタリアでは、コッラディーニや ANI のナショナリズムが主流となり、その後のファシズムの下地を形成した。しかし、ヴァンバと GDD は、ファシズムに転化しない、別のナショナリズムの可能性を例示した。ヴァンバと GDD は、イタリア性 (Italianità) を強調しつつ、植民地主義に繋がらない独立の希求と人間としての善意 (Bontà) を重視した。そして、子どもを大人と平等の存在として扱い、「同盟」はそれを体現したものであった。そこには個人と市民が重要な存在として位置づけられていた。その背景には、フィレンツェのパトリア＝自由な共和国の伝統の存在が無縁ではないだろう<sup>103)</sup>。マッツィーニやガリバルディに傾倒し、リソルジメントの系譜を引くヴァンバは GDD において、コッラディーニや ANI の植民地主義的・侵略的ナショナリズム (あるいはマッツィーニが嘆いた「低劣なナショナリズム」)<sup>104)</sup> とは一線を画するナショナリズムを提示したといえよう。だが、そのようなナショナリズムは大方の注目を集めることなく、第一次世界大戦開始前に GDD が廃刊されると、次第に消え去っていった。

日本においては、明治政府が早くから天皇と国家への忠誠心を強調し、中央集権化を進めた。特に 1890 年の教育勅語発出以降、幼少期の児童生徒への天皇制思想の注入とともに中央集権化は一層加速された。『少年世界』やその他の子ども向け書籍は、そのような「上からの」中央集権化を支援した。子どもは子どもらしくすべきである、つまり大人によって教育されるべき存在として、さらに言えば、教師によって「正しく」導かれるべき存在として捉えられた。『少年世界』やその他の子ども向け書籍は、「軍事」・「英雄」・「立身出世」といった価値を強調しつつ、「一等国」意識に象徴される序列意識を涵養した。同時に、個人の「立身出世」と植民地主義を伴う侵略的ナショナリズムを提示した。このように個人と国家が安直に連結された日本では、ナショナリズムから軍国主義的ファシズムへの単線的な道筋が敷かれることとなった。

20 世紀初頭において、ファシズムを生んだイタリアにおける GDD と後にイタリアに倣ってファシズムに傾斜する日本における『少年世界』は、対照的で逆説的な国民意識形成とナショナリズムの事例を提示しているといえよう。

### 〈注〉

- 1) 高橋進『イタリア独裁体制の思想と構造』法律文化社、1997 年、150-152 頁。
- 2) ジェンティーレに関しては、A. James Gregor, *Giovanni Gentile: Philosopher of Fascism*, New Brunswick:

Transaction Publishers, 2008, などを参照。

- 3) アルフレード・ロッコ、ジョヴェンニ・ジェンティーレ、ベニート・ムッソリーニ『ファシズムの原理』紫洲書院、2019年、50頁。
- 4) 同前、54頁。
- 5) 同前、74-79頁。
- 6) Marco Palla, *Fascismo*, Firenze: Giunti Gruppo Editoriale, 1998, p.6.これは一般向けの概説入門書で、そこでも冒頭にかかる指摘がなされている一例である。
- 7) アンリ・ミシェル『ファシズム』白水社、1978年、36頁。

- 8) たとえば、『朝日新聞』・『読売新聞』に見るファシズム関連記事の件数は右の通りである。なお、初出は『朝日新聞』が1922年11月12日付、『読売新聞』が1920年3月5日付である。

この他にも、1930年代になると「猫も杓子も……『ファッショ！ファッショ！』といふ」状況は指摘されている（『読売新聞』1932年3月8日付朝刊4面〈文芸〉前田河広一郎「ファッショ化流行る【一】」）。

- 9) たとえば、「ファッショ」の特徴として、「愛国主義」（『読売新聞』1931年11月19日付朝刊4面「文芸」杉森孝次郎「ファッショ化運動の世界的現勢【一】」）、「拳国一致的」、「国民的」、「能率」と「直接行動主義」などが早くから指摘される一方で（『読売新聞』1931年11月21日付朝刊4面「文芸」杉森孝次郎「ファッショ化運動の世界的現勢【二】」）、その「朦朧性」も指摘されている（『読売新聞』1932年1月5日付朝刊4面〈評論時評〉長谷川如是閑「ファッショ諸問題」）。

| 時 期        | 『朝日新聞』 | 『読売新聞』 |
|------------|--------|--------|
| 1920～1930年 | 18     | 28     |
| 1931年      | 12     | 21     |
| 1932年      | 16     | 199    |
| 1933年      | 19     | 120    |
| 1934年      | 12     | 62     |
| 1935年      | 20     | 148    |
| 1936年      | 20     | 134    |
| 1937年      | 24     | 83     |
| 1938年      | 28     | 76     |
| 1939年      | 29     | 88     |
| 1940年      | 18     | 76     |
| 1941年      | 8      | 22     |
| 1942年      | 4      | 8      |
| 1943年      | 35     | 20     |
| 1944年      | 4      | 14     |
| 1945年      | 11     | 27     |

- 10) ウンベルト・エーコ『永遠のファシズム』岩波書店、2018年、40頁。
- 11) Jeffrey T. Schnapp, “Fascinating Fascism”, in: *Journal of Contemporary History*, Vol. 31, No. 2, Special Issue: The Aesthetics of Fascism (Apr., 1996), p.237.
- 12) John Breuilly, “Nationalism and National Unification in the Nineteenth-Century Europe”, in: John Breuilly (ed.), *The Oxford Handbook of The History of Nationalism*, Oxford: Oxford University Press, 2013, p.575.
- 13) エーコ、前掲書、40頁。
- 14) 「全体主義的」(totalitarian) 及びその派生語は、1925年以降ファシスト自らが使用し始めた。ファシストは、それを自らの政治・国家の概念と規定し、その象徴とした。これは、ファシスト党とその指導者に全権が集中されるべきであるという考えに基づいている (Adrian Lyttelton(ed.), *Liberal and Fascist Italy, 1900-1945*, New York: Oxford University Press, 2002, p.141.)。また、ジェンティーレとムッソリーニによって想像されたイタリア・ナショナリズムこそが、全体主義という政治的イデオロギーへナショナリズムを転化させたとの指摘については、Liah Greenfeld, *Advanced Introduction to Nationalism*, Cheltenham & Northampton: Edward Elgar Publishing Ltd., 2016, p.64, などを参照。
- 15) Aristotle A. Kallis, *Fascist Ideology: Territory and expansionism in Italy and Germany, 1922-1945*, New York: Rutledge, 2000, p.9.
- 16) この指摘は定説化しているといえよう。たとえば、以下を参照。Mauro Marsella, “Enrico Corradini’s Italian nationalism: the ‘right wing’ of the fascist synthesis”, in: *Journal of Political Ideologies*, 9-2, (June, 2004), pp.203-204, Richard Drake, “The Theory and Practice of Italian Nationalism, 1900-1906”, in: *The Jour-*

- nal of Modern History*, Vol. 53, No. 2, (June, 1981), p.214, Alexander J. De Grand, “The Italian Nationalist Association in the Period of Italian Neutrality, August 1914-May1915”, in: *The Journal of Modern History*, Vol. 43, No. 3, (Sep., 1971), pp.394-412, Ross Stagner, “Fascist Attitudes: An Exploratory Study”, in: *Journal of Social Psychology*, Vol.7, Issue 3, (Aug., 1936), p.309-319, Dante Germino, “Italian Fascism in the History of Political Thought”, in: *Midwest Journal of Political Science*, Vol. 8, No. 2, (May, 1964), pp.109-126, Walter L. Adamson, “Modernism and Fascism : The Politics of Culture in Italy, 1903-1922”, in: *The American Historical Review*, Vol.95, No.2, (April, 1990), pp.359-390.
- 17) Marsella, *op.cit.*, p.219.
  - 18) Adamson, *op.cit.*, p.366.
  - 19) 世代的な要素を指摘している事例として、たとえば、Reto Hofmann, *The Fascist Effect: Japan and Italy, 1915-1952*, Ithaca: Cornell University Press, 2015, p.2, などを参照。
  - 20) 以下の拙稿はそのような間隙を埋めるものでもある。「20世紀初頭のイタリアにおける国民意識創出の試み——子ども向け日曜新聞 *Il giornalino della domenica* と Luigi Bertelli についての一考察——」『和光大学現代人学部紀要』第10号、2017年3月、7-23頁、及び「第一次世界大戦前後のイタリアにおける国民意識創出に関する一考察——ヴァンバの「イタリア性」および「バリッラ」観をめぐって——」『和光大学現代人学部紀要』第11号、2018年3月、7-22頁。
  - 21) 一例として、久米依子「<子ども>という領域：明治少年文学の行方」『日本文学』第43巻第11号、1994年、47-55頁、岩田一正「明治後期における少年の書字文化の展開：『少年世界』の投稿文を中心に」『教育学研究』第64巻第4号、1997年、417-426頁、山口（内田）雅克「ウィークネス・フォビアの形成：明治期『少年世界』に見る'男性性'」『ジェンダー史学』第3巻、2007年、33-44頁、田中卓也「近代少年雑誌における読者に関する一考察——明治期～昭和初期における『少年世界』読者の特徴を中心に——」『順正短期大学研究紀要』第38号、2009年、27-40頁、などがある。そのような中で、わざわざ大竹聖美「明治期少年雑誌に見る朝鮮観——日清戦争（1894）～日韓併合（1910）前後の『穎才新誌』・『少年園』・『小国民』・『少年世界』』『朝鮮学報』第188号、2003年7月、77-103頁、は日本の朝鮮イメージについて扱っているものの、形式的分類整理と『少年世界』からの引用紹介の比重が大きい。
  - 22) たとえば、浅沼和典・河原宏・柴田敏夫『比較ファシズム研究』成文堂、1982年、は、イデオログや哲学者を個別に取り上げている嫌いが強く、日本とイタリアの比較という点では必ずしも十全とはいえない。また、ナショナリズムの比較という観点では、日本とドイツが対象の中心となる傾向が強い（一例として、佐藤成基「国家・市民社会・ネーション：ドイツ・日本の国民国家形成における『上からの革命』テーゼをめぐって」『茨城大学人文学部紀要・社会科学論集』第33巻、2000年3月、41-66頁）。英米では、ドイツとイタリアの比較という視点での研究が多い（Stagner, *op.cit.*, Germino, *op.cit.*, などを参照）。その中で、「統制」という観点からアメリカを含めてファシズム、ナチズムを比較したヴォルフガング・シヴェルプシュ『三つの新体制——ファシズム、ナチズム、ニューディール』名古屋大学出版会、2015年、などもある。いずれにしても、日本とイタリアとの比較という点での研究は僅少で、一例として Reto Hofmann, *op.cit.*, が挙げられる。なお、戦後の憲法制定と民主主義体制構築をめぐって日本とイタリアを比較したものとして石田憲『戦後憲法を作った人々——日本とイタリアにおけるラディカルな民主主義——』有志舎、2019年、がある。
  - 23) 久米邦武編田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記（四）』岩波文庫、1980年、266頁。
  - 24) 同前、270頁。
  - 25) Giovanni De Riseis, *Il Giappone moderno*, Milano:Fratelli Treves, 1900, p.80, 154, 207, 245,412. なお、デ・リセイスについては拙稿「イタリア人青年の見た日清戦争前後の日本——Giovanni De Riseis の *Il Giappone moderno* に見る日本イメージ——」『和光大学現代人学部紀要』第8号、2015年3月、53-70頁、

を参照。

- 26) Richard Drake, "The Theory and Practice of Italian Nationalism, 1900-1906", in: *The Journal of Modern History*, Vol. 53, No. 2 (Jun., 1981), p.240.
- 27) バリントン・ムーア『独裁と民主政治の社会的起源——近代世界形成過程における領主と農民——』下巻、岩波文庫、2019年、337頁。
- 28) マッシモ・ダゼリオ (Massimo d'Azeglio) の言といわれて流布したが、正確には「イタリアが必要とする第一のことは、自らの義務の果たし方を知るイタリア人を創ることであり、強固な意志を持った不屈の性格を形成することが必要である」とダゼリオは記している (Emilio Gentile, trl.by S.Dingee and J.Pundney, *La Grand Italia: The Myth of the Nation in the Twentieth Century*, Madison: The University of Wisconsin Press, 2009, p.36, 及び北村暁夫『イタリア史10講』岩波書店、2019年、188頁、参照)。
- 29) イタリアでは国家と国民の乖離が政治と文化の乖離に雁行していた。国民・国家の不在ないしは空虚さについて奇妙な不安が存在した。同時に、「イタリア人を造る」ことには、大人の解放のみならず子どもの教育が挙げられるとともに、現在のみならず将来の人間に言及されるという二つの側面があった (Suzanne Stewart-Steinberg, *The Pinocchio Effect on Making Italians, 1860-1920*, Chicago & London: University of Chicago Press, 2007, pp.2-6.)。
- 30) ジョリッティ体制については、馬場康雄「ジョリッティ体制の危機—1—形成期のイタリア民主政をめぐる」『社会科学研究』(東京大学社会科学研究所) 第31巻第2号、1979年7月、1-73頁、及び同「ジョリッティ体制の危機—2—形成期のイタリア民主政をめぐる」『社会科学研究』(東京大学社会科学研究所) 第31巻第4号、1980年1月、1-78頁、クリストファー・ダガン著河野肇訳『ケンブリッジ版世界各国史 イタリアの歴史』創土社、2005年、238-262頁などを参照。
- 31) フィレンツェを中心とした20世紀初頭の雑誌文化の隆盛については、倉科岳志編『ファシズム前夜の市民意識と言語空間』慶應義塾大学出版会、2008年、森岡鉄郎・重岡保郎『世界現代史22 イタリア現代史』山川出版社、1977年、185-198頁、などを参照。
- 32) シモーナ・コラリーツィ『イタリア20世紀史』名古屋大学出版会、2010年、23-30頁。
- 33) コッラディーニについては、Marsella, *op.cit.*, Drake, *op.cit.*。またANIについては、De Grand, *op.cit.*, pp.394-412, *Il Nazionalismo Italiano, Atti del Congresso di Firenze, e relazioni di E.Corradini, M.Maraviglia, S.Sighele, G.de Frenzi, F.Carli, L.Villari, M.P.Negrotto, a cura di G.Castellini*, Firenze: La Rinascita del Libro, Casa Editrice Italiana di A.Quattrini, 1911, などを参照。
- 34) これらの言葉自体は、1911年1月に第二次桂内閣と政友会との提携を改めて確認し、その正式発表の席上で桂・西園寺両名がともに用いた (三宅雪嶺『同時代史』第四巻、岩波書店、1952年、104-105頁)。
- 35) たとえば、Kenneth G.Henshall, *A History of Japan: From Stone Age to Superpower*, 2nd ed., New York: Palgrave Macmillan, 2004, pp.95-96.
- 36) 三宅雪嶺『同時代史』第三巻、岩波書店、1950年、475頁。
- 37) 同前、482頁。
- 38) 三宅、前掲『同時代史』第四巻、15頁。
- 39) 岡義武『明治政治史』下巻、岩波文庫、2019年、345-349頁。
- 40) たとえば、『読売新聞』には1908~1911年の間に、青年の「煩悶」を中心に、42件の「煩悶」関連記事が掲載されている。
- 41) 北星住人「明治歴史を渴望す 五」、1903年11月9日付『朝日新聞』東京、朝刊6面。
- 42) 「一等国」意識の肥大化とそれに警鐘を鳴らした竹越與三郎 (三叉) の論調については、拙稿「竹越與三郎のアジア認識」、黒沢・斎藤・櫻井編『国際環境のなかの近代日本と世界』芙蓉書房出版、2001年、133-166頁、を参照。

- 43) テゾーロ・マリーナ「イタリアにおける君主制、国家、国民 一八四八年～一九四六年」『日伊文化研究』51号、2013年、11頁。
- 44) ヴァンバおよびGDDについては、前掲拙稿「20世紀初頭のイタリアにおける国民意識創出の試み——子ども向け日曜新聞 *Il giornalino della domenica* と Luigi Bertelli についての一考察——」『和光大学現代人間学部紀要』第10号、2017年3月、7-23頁、を参照。なお、タイトルからもわかる通り、GDDは週刊で発行された。
- 45) GDD Anno I, N.1, 24 Giugno 1906, p.2 (以下 GDD I-1 と表記する)。
- 46) 「海水浴や避暑地からの通信」(Corrispondenze dai bagni e dalla campagna)、GDD II-30, 28 Luglio 1907, pp.1-4。
- 47) たとえば、「子どもたちの国で」(Nel paese dei ragazzi)、GDD II-35, 1 Settembre 1907, pp.1-12、では、大判の写真を多く掲載するとともに挿絵をふんだんに使用して夏休み中の各地の子どもたちの様子を生き活きと伝えている。
- 48) 「いとまごい」(Commiato)、GDD VI-30, 23 Luglio 1911, pp.16-19。
- 49) Anna Ascensi, “Lettere a Vamba. 《Il Giornalino della Domenica》 nei rapporti epistolari tra Luigi Bertelli e i suoi collaborari”, in: *History of Education & Children’s Literature*, I/1, 2006, p.319。
- 50) ヴァンバ著池上俊一訳『ジャン・プラスカの日記』平凡社、2008年。
- 51) GDD II-7, 17 Febbraio 1907, pp.11-16。
- 52) GDD III-20, 17 Maggio 1908, pp.11-12。
- 53) たとえば、Vamba, *Il Giornalino di Gian Burrasca*, Milano: Giangiaco­mo Feltrinelli Editore, 1994、はいわゆるペーパーバックの普及版だが、2009年までで4版を重ねている。
- 54) 「ピア門」(Porta Pia)、GDD II-38, 22 Settembre 1907, p.1、「9月20日」(XX Settembre)、GDD I-13, 16 Settembre 1906, pp.1-4、「君たちはガリバルディのような人になりたいかい？」(Volete voi essere garibaldini?)、GDD II-27, 7 Luglio 1907, pp.1-5。
- 55) 「コッローディ」(Collodi)、GDD I-23, 25 Novembre 1906, p.1、「ジョスエ・カルドゥッチ」(Giosuè Carducci)、GDD I-25, 9 Dicembre, 1907, p.3、「子どもたちの中のカルドゥッチ」(Giosuè Carducci tra i ragazzi)、GDD II-8, 24 Febbraio 1907, pp.18-20、「半世紀前」(Mezzo secolo fa)、GDD VI-13, 26 Marzo 1911, pp.1-3、など。また、表題には氏名がないものの「人生を愛すべきだ」(Si deve amare la vita)、GDD III-12, 22 Marzo, 1908, pp.5-10、はデ・アミーチスについて扱ったものである。
- 56) 「1850年の戦争」(La guerra del 1850)、GDD IV-26, 27 Giugno 1909, pp.1-8、「フランチェスコ・ロイアーコノ」(Francesco Loiacono)、GDD IV-23, 6 Giugno 1909, pp.1-3、「ステファノ・カンツィエ」(Stefano Canzie)、GDD IV-4, 24 Gennaio 1909, pp.1-3、などでも随所にガリバルディへの言及が目につく。
- 57) 「バリッラと呼ばれるイタリアの息子たち」(I figli d’Italia si chiaman Balilla.....)、GDD VI-10, 5 Marzo 1911, pp.5-8。
- 58) 前掲「子どもたちの中のジョスエ・カルドゥッチ」(Giosuè Carducci tra i ragazzi)、GDD II-8, 24 Febbraio 1907, pp.18-20。また、日本のおとぎ話の翻訳「花坂爺」(Il vecchio che faceva fiorire gli alberi secchi)、GDD II-41, 13 Ottobre 1907, pp.10-11、は善行を説くものとして紹介されており、「控えめな英雄たち」(Umili eroi)、GDD VI-3, 15 Gennaio 1911, pp.16-17、はアルノ川に溺れかけた子どもを救助した若者たちの勇敢な行動を紹介している。
- 59) 前掲「バリッラと呼ばれるイタリアの息子たち」(I figli d’Italia si chiaman Balilla.....)、GDD VI-10, 5 Marzo 1911, p.8。
- 60) Ascensi, *op.cit.*, p.320。
- 61) 前掲「バリッラと呼ばれるイタリアの息子たち」(I figli d’Italia si chiaman Balilla.....)、GDD VI-10, 5 Marzo 1911, p.8。
- 62) 「GDD購読者同盟宣言」(Proclamazione della Confederazione Giornalinesca)、GDD III-26, 28 Giugno 1908、

pp.I-V.

- 63) 同前、GDD, III-26, 28 Giugno 1908, p. I.
- 64) ジッドは、フランスでは14歳で「すっかり固まってしまう」として、若者が可能性を信じなくなってしまうと批判しつつ、ソ連では「若者でいる時代が長い」点を評価している。これに続けて、「人生を前にした驚きがもうその顔には読み取れなくなり、素朴さのかけらも見られなくなる。子どもはほとんどすぐに〈年の若い大人〉になるのである。遊びの時間はおしまいというわけだ」と述べている(アンドレ・ジッド『ソヴィエト旅行記』光文社、2019年、45頁)。
- 65) Ascensi, *op.cit.*, p.320. なお、ANIはイッレデンティストと権威主義的帝国主義者の結合体であった、と指摘されている(De Grand, *op.cit.*, p.395)。
- 66) 上田信道「解説」、巖谷小波『日本昔噺』平凡社、2001年、467頁。
- 67) 巖谷が博文館に入り『少年世界』主筆となるについては、かねてから親交のあった博文館の大橋新太郎の慫慂と尾崎紅葉の勧めがあった(巖谷季雄(小波)『我が五十年』久山社(復刻)、1987年(原著は東亜堂、1920年)、246-247頁)。
- 68) 「明治二十八年を迎ふ」『少年世界』第1号第1巻、1895年1月1日、4頁(以下『少年世界』1-1と略記する)。当初は月2回の発行だったが、1906年(第6巻)から月1回の発行に変わった。なお、「少年世界(第一号)」(1895年1月10日付『朝日新聞』(東京)第3面)でも、同誌は「最も小国民の好伴侶たるべきもの」としている。また巖谷については、遠藤純『『少年世界』主筆としての巖谷小波: その編集者意識について』『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』第29号、2016年、55-73頁、を参照。
- 69) 『太陽』ならびにその論調傾向などについては、拙稿「雑誌『太陽』の一側面について」和光大学総合文化研究所年報『東西南北2007』、2007年3月、252-285頁、を参照。
- 70) 1894年12月28日付『朝日新聞』第6面。他紙にも同様の広告は掲載されている。
- 71) 前掲「明治二十八年を迎ふ」『少年世界』1-1、1895年1月1日、4頁。
- 72) 「第二の維新」『少年世界』1-2、1895年1月15日、121頁。
- 73) 同前、122頁、「亜細亜の半面を担当する者」『少年世界』1-11、1895年6月1日、2頁。
- 74) 「少年と尚武」『少年世界』1-9、1895年5月、844頁。
- 75) 「明治廿八年を迎ふ」『少年世界』1-1、1895年1月1日、3頁。
- 76) 同前、4頁。
- 77) 「我が敵」『少年世界』1-5、1895年3月1日、522頁。
- 78) 「台湾土産(八)」1899年11月21日付『朝日新聞』(東京)第3面。
- 79) 『少女世界』については、たとえば塩屋知里『『少女世界』の少女表象: 主筆沼田笠峰の小説分析から』『近代文学試論』(広島大学近代文学研究会)第51号、2013年12月、1-14頁、などを参照。
- 80) 本稿の扱う時期について見ると、たとえば、第3巻1号(1897年1月1日)からは創刊当初のような項目別の区分けがなくなり、記事毎に「海軍談」などの項目が括弧内に示される形式となった。その後第7巻1号(1901年1月1日)から再び項目別の区分けがなされ、ここに「軍事」という項目が登場した。第8巻11号(1902年8月1日)からは再び項目別の区分けがなくなり、記事毎の項目記載もなくなった。第12巻1号(1906年1月1日)から再び項目別の区分けがなされ、ここに「陸海軍」という項目が置かれた。第15巻1号(1909年1月1日)からは三たび項目別区分けがなくなり、記事毎の項目記載もなくなった。このように体裁はかなり変化している。
- 81) 「今でわ世界中でも、／一番強い国／の仲間入りをして、国を増々進んで行く様になりました」などの記述が目を引き(少年世界編輯部編『明治少年節用』博文館、1903年、120頁、「日本歴史」の項、なお「わ」の用語法は特徴的で意識的に用いられている)。
- 82) 「一等国」意識とそれに対する批判については、前掲拙稿「竹越與三郎のアジア認識」を参照。

- 83) 「日本は小さくても強い」『少年世界』13-13、1907年10月1日、56-58頁。
- 84) 「朝鮮の併合と少年の覚悟」『少年世界』16-13、1910年9月22日、22頁。
- 85) 特に「懇談会」は、読者の投稿で形成されたが、書籍や雑誌の交換希望広告の様相を呈する一方、他人の文章を剽窃して賞品を得ようとする傾向が顕著になっていた（『少年世界』12-8、1906年6月1日、135頁、同12-10、1906年8月1日、117-118頁など）。
- 86) 「少年新聞」『社説』『少年世界』13-1、1907年1月1日、126頁。
- 87) たとえばスペイン・ポルトガルについて、「海外の領地は全然無くなりましたし、国は小さくなって、一等国から二等国へ落ちて了った」と、植民地を失ったことで序列が下がったとの認識を露わにしている（巖谷小波・金子紫草『少年世界読本』第4巻、博文館、1907年、21頁）。
- 88) 『少年世界』14-3、1908年2月15日、1-96頁。さらに、1912年には「立身と試験」という特集が組まれている（『少年世界』第18巻5号、1912年3月9日、34-102頁）。その中には、「如何したら立身出世が出来るか」といった赤裸々な記事も含まれている（同前、57-74頁）。
- 89) 『少年世界』13-15、1907年11月15日、31-118頁。
- 90) 『少年世界』14-15、1908年11月15日、1-97頁。
- 91) 『少年世界』15-15、1909年11月10日、6-100頁。
- 92) 大町桂月『軍国訓』博文館、1904年、200頁。
- 93) 前田長太（越嶺）『世界武將伝：少年史談』博文館、1909年、3-4頁。
- 94) 同前、1頁。
- 95) 『少年世界』17-16、1911年11月20日、70頁。
- 96) 巖谷小波・金子紫草『少年世界物語』第3巻「世界の陸軍」、博文館、1909年、13頁では、「此節では、各本国の外に大抵は属国とか領地とかを有つて居ますから、此処へも相応に軍隊を置かなければならぬ」と植民地領有とそのための軍隊駐留が当然であると述べている。
- 97) 前掲「朝鮮の併合と少年の覚悟」、『少年世界』16-13、1910年9月22日、21頁。
- 98) 「明治四十三年を送る」『少年世界』16-16、1910年11月22日、88頁。
- 99) 「戊申詔書略解」『少年世界』15-3、1909年2月15日、2-18頁。
- 100) 巖谷小波「嘘の価値」『婦人と子ども』第6巻第8号、1906年8月、16-17頁。
- 101) Hans Kohn, *The Idea of Nationalism: A Study in its Origins and Background*, New Brunswick: Transaction Publishers, 2005 (originally New York: Macmillan, 1944), p.10.
- 102) たとえば、ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』書籍工房早山、2007年。なお、ナショナリズムを近代特有の産物とするアンダーソンの議論に対し、エトニとエスニシティに着目してナショナリズムは通時的に存在したとの観点からナショナリズムを論じたものとして、アントニー・D・スミス『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会、1999年、などを参照。
- 103) マウリッツォ・ヴィローリ『パトリオティズムとナショナリズム——自由を守る祖国愛』日本経済評論社、2007年、50-64頁。
- 104) 同前、269-270頁。